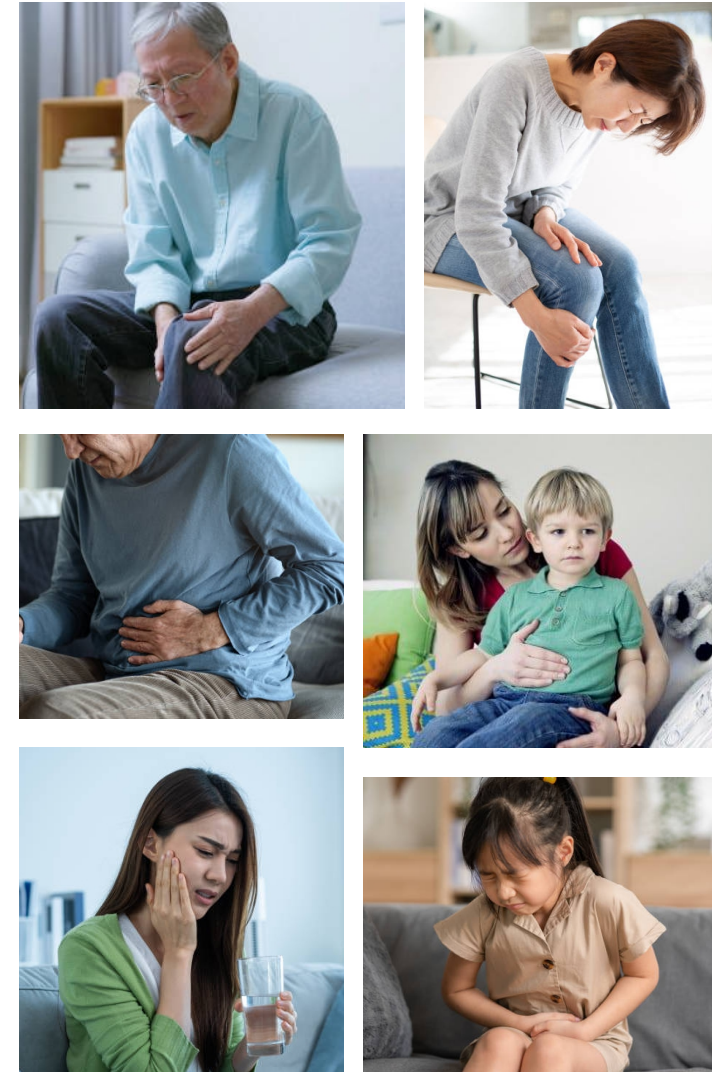


痛いところに手を当てる理由

老若男女を問わず、痛いところがあれば、そこに手を当てる

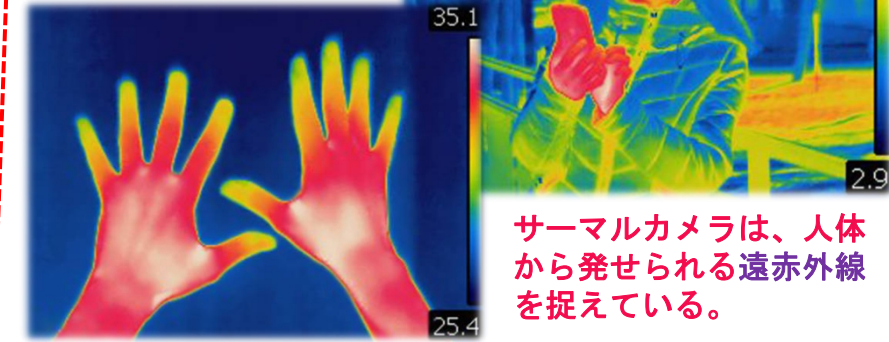


<作成: stnv基礎医学研究室>

手を当てる理由

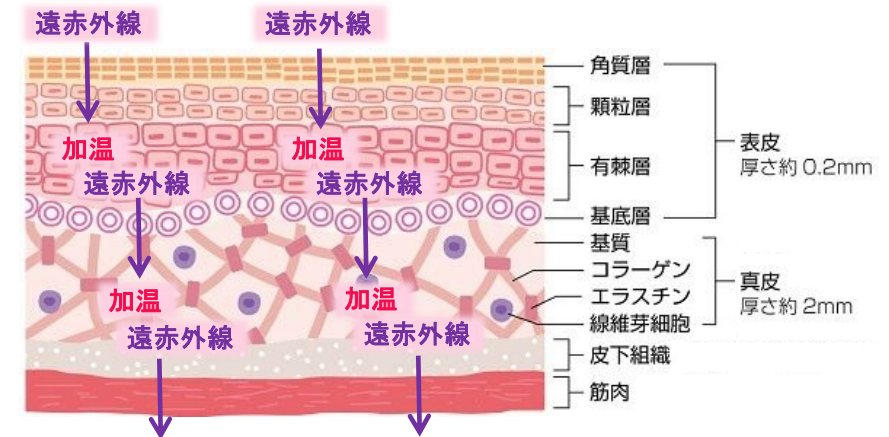
1. その行為が本能として備わっているため
何も教えられていない子どもも、同じように無意識的に手を当てる。
2. 触覚や圧覚を優先させることによって、痛覚が抑制されるため
手を当てられた皮膚は、手が触れているという触覚や、手で押さえられているという圧覚を脳に送るため、脳は痛覚情報処理だけに専念できなくなり、結果として痛みが緩和する。
3. 壊れたかも知れない組織を物理的に保護するため
患部の状況は解らないことが多いが、その部分が損傷している可能性があるため、手を当てることによって物理的に保護する。
4. 出血の可能性もあるため、圧迫によって止血するため
止血帯の代わりに手で行う。
5. 圧迫によって急性炎症を緩和するため
急性炎症は大切な反応であるが、過剰になると痛みも組織損傷も酷くなるため、手で圧迫する。
6. スキンシップによって痛みを緩和するため
相手に手を当てる場合は特に、スキンシップによってオキシトシンの分泌量が高まり、疼痛が緩和する。
7. 患部に遠赤外線を送るため
手の平から発せられる遠赤外線によって、損傷部分の治癒を促進させる。

→ 私たちの体は遠赤外線を発している



サーマルカメラは、人体から発せられる遠赤外線を捉えている。

遠赤外線の直接的な皮膚透過距離は0.2mm程度であるが、0.2mmまでの細胞層が加温されると、その細胞層が遠赤外線を発して、その下層の細胞層に伝えていくことや、皮下の血液が加温されて全身を巡るため、やがては全身が温まることになる。



種々の「温度感受性TRPチャネル」を通じた反応によって治癒が促進される。